

氏名	岡田 理香
学位の種類	博士(文学)
報告番号	甲第495号
学位授与年月日	2018年9月19日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	C.S. ルイスと「神話」 ——ルイス作品に見る「神話創作」としての「キリスト教」
審査委員	(主査) 西原 廉太(立教大学大学院キリスト教学研究科教授) 久保田 浩(明治学院大学国際学部教授) 斎藤 康代(東京女子大学名誉教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

第一部

第1章 序

- 第1節 先行研究と考察対象とするテキスト
- 第2節 本論文のテーマを貫くもの——「神話」
- 第3節 本論文の構成

第2章 両大戦下と戦間期におけるルイス

- 第1節 戦間期のBBC ラジオと出版事情
- 第2節 戦間期の宗教・思想状況
- 第3節 ルイスの友人たち

第3章 「キリスト教」へのルイスの道のり

- 第1節 『喜びの訪れ』に見られるルイスの原体験
- 第2節 神話への傾倒
- 第3節 「回心」とされる体験

第二部

第4章 『天国と地獄の離婚』における新たな「煉獄」

- 第1節 「煉獄」の描写
- 第2節 『天国と地獄の離婚』に見る「煉獄」
- 第3節 選択の重要性と「煉獄」

第5章 『ナルニア国年代記』第7巻『最後の戦い』に見る「救済」

- 第1節 ファンタジーとは
- 第2節 『ナルニア国年代記』の概略
- 第3節 「救済」の描かれ方

第6章 『顔を持つまで』に見る「天国」と「神話」

- 第1節 『ナルニア国年代記』各巻における「天国」
- 第2節 『顔を持つまで』の「天国」
- 第3節 ルイスの「神話」

第7章 結語

- 第1節 各章の内容
- 第2節 ルイスの「神話創作」について考察する意義——トールキンとルイス
- 第3節 今後の展望

(2) 論文の内容要旨

従来の C. S. ルイス研究は、作品から彼の思想とその時代的文脈、あるいは彼のキリスト教的背景を読み取ろうとするアプローチが主流を占めている。そうした中で本論文は、彼が活躍した当時の時代背景の一つに神話研究が興隆していたこと、そして彼自身が「神話創作」論を展開していたこと、ならびに彼の創作行為自体に着目し、新たな観点からのルイス研究を提示しようとするものである。

以上の問題関心から本論文は、ルイスの神話的「別世界」表象として「煉獄」と「天国」の表現を、そして両者をつなぐものとしての「救済」の記述を分析するという手法をとる。

第一部では、以上の分析の前提作業として、ルイス作品が成立した時期の時代背景を概観すると共に、第二部の分析のための概念装置を紹介する。先行研究の概要と本論文の着眼点が述べられた(第1章)のち、彼の活動期である両大戦中・戦後の出版状況・宗教状況並びに彼の交友関係が確認される(第2章)。そして、ルイス研究において繰り返し言及されている彼の「回心」の問題を、最新の研究成果を踏まえつつ、かつて離れたキリスト教への回帰としてではなく、幼少期に傾倒した神話的物語の再評価という観点から解釈し直し、第二部への橋渡しを行っている(第3章)。

第二部では各章ごとに先述の「煉獄」、「救済」、「天国」が、それぞれ一つ、または複数の作品を中心に据えて論じられる。主に『天国と地獄の離婚』の中の「煉獄」について考察する第4章は、ローマ・カトリック的でもアングリカン的でもない「煉獄」が描かれていることを指摘し、「煉獄」の描写(特に人間が「選択」する場面)の中に、あるいはそれを通して、ルイス独自の「キリスト教」理解を読み取ろうと試みている。第5章では、「煉獄」での浄化を経た後の「救済」についてのルイスの描写が、『ナルニア国年代記』を中心に考察される。ここでは前章で指摘された「選択」並びに万人救済説との関連で「救済」理解が分析されている。なおこの章では、ルイスの「神話」理解との関連で、トールキンとルイスの「ファンタジー」論が比較され、前者の「準創造」観の后者への影響が指摘されている。続く第6章は、もう一つの「別世界」である「天国」を、『顔をもつまで』や『ナルニア国年代記』等の解釈を通して浮かび上がらせようとする。ルイスの「天国」の描写からは、一般的に解釈されているような死後の世界だけではなく、現世と連続性を持ち、現世においても一不十分であったとしても一経験し得る場所という特徴が読み取れるとされる。その上で、ルイスの「神話」理解と、ルイス作品の「神話」性が論じられる。

結語となる第7章では、改めてトールキンの「神話」理解との対比が試みられ、神の被造物である人間が、神の創造行為に準ずる「準創造」の営みとして「神話創作」を行うという点に関する両者の共通点、同時に「別世界」と現世との関係についての両者の相違点(トールキンにおける非連続性、ルイスにおける連続性)について指摘された上で、ルイスの「神話創作」行為にこそ、彼の「キリスト教」理解の特徴が如実に見られることが結論として述べられている。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、C. S. ルイスの宗教的・思想的背景、並びに彼の作品の緻密な読みに基づいて、これまでのルイス研究が十分に検討することができていなかった、あるいは問題として提起されることがなかったトピックを論じようとする、果敢な意欲が感じられるものとなっている。従来のルイス研究には、文学研究とキリスト教研究の二分野に分離される傾向が見られる。本論文はそうした分断的状况を乗り越えて、文学研究・キリスト教研究双方からの問題提起と研究の蓄積を踏まえつつも、一方に傾くことなく、両者を統合する分析視点を模索しようと試みている。それが、文学者かつ宗教者ルイスの「執筆」という営為への着目、そして文学表現かつ宗教表現でもあり得る「神話」とその「創作」行為の分析として現れていると言えよう。

文学的テキストか宗教的テキストかを問わず、学問的にある作品の内容を検討する場合、テキストから思想とその特徴を抽出していくことは極めて伝統的な作業であり、また作品の生成を論じる場合も、それを著者の履歴・心理的情動・社会文化的環境・同時代的出来事等々の文脈の中に位置づける（あるいは還元させる）というアプローチが伝統的にとられている。その意味で、執筆営為自体への分析的眼差しはかつての構造主義的批評や言語行為論を想起させるものでもあり、テキストを思想内容の表出物へと矮小化することに対しても、他方でテキストをその都度の文脈へと還元させてしまうことに対しても、原理的な異議申し立てとなり得、理論的にも実際のテキスト解釈においても、従来のアプローチを補完、さらには解体する批判的作業となり得る。本論文はこのような意味において、文学研究・キリスト教研究のみならず、テキスト研究一般に対しても、問題を提起し、方法的かつ理論的な再考を促すものとなっている。

(2) 論文の評価

本論文の具体的な分析並びに結論が、このような問題提起自体に相応しているかについては、若干の留保が必要である。問題提起と具体的分析との間の齟齬が散見され、それが論文全体の主張内容の一貫性を一部損なっているとも考えられるからである。

しかしながら、以上の点は今後の研究において深化と進展が十分に見込まれるものであり、ルイス作品へのアプローチとして打ち出された新機軸の意義、並びに精緻なテキストの読み込みとそれに基づいて提出された、「神話創作」としてのルイス作品の解釈自体の重要性を損なうものではなく、今後のルイス研究に貴重な一石を投じることになる論文であると高く評価できる。